

鎌田茂雄著「華嚴の思想」講談社学術文庫、講談社、1988年5月10日刊を読む

みじん
微塵のなかに一切を見る一即多

1. (1)『華嚴經』でいちばん多く説かれるのは、微塵のなかに大きな世界が全部入り込んでしまうのだという考え方で、これが根底にある。
(2)簡単にいうと「一即多・多即一」、これが『華嚴經』で説かれるいちばん根本的な考え方である。
(3)経文のどこを読んでもこのことが書いてあるが、しかもそれを空間的と時間的に分けて考えていく。
2. (1)空間的にも、一点のなかに全世界が映し出されるということで、ヨーロッパでいうとライプニッツの「モノドロジー(单子論)」のような考え方である。
(2)ライプニッツのモノドロジーは、一つのモノド(元素)がある、そのなかに全宇宙が映し出されるという考え方だが、『華嚴經』では、一つの存在のなかにあらゆるものが映し出されるということを説く。
3. (1)因陀羅網で説明すると、網のA点を持ち上げると無限にあらゆる点がからみ合っていく、B点を持ち上げると無限にからんでいく、C点を持ち上げると無限にこれが関係してくる。
(2)C点を持ち上げているときには、Cを中心にあらゆるものがここに関係をしてくる。B点のときにはBを中心に関係をしてきて、Bが主人公でCは伴になる。
(3)そういう無限の関係をいうわけである。
4. 因陀羅網とはインドラ (Indra) の網、すなわち帝釈天宮にある宝網のことで、その結び目にある珠玉が互いに相映じ、映じた珠がまた映じ合って無限に映じる関係でもって、華嚴の重々無尽を説明するのである。
5. (1)米一粒を見ても、この米一粒は米屋から買ってここまで運んだのであるが、それには米屋もいるし、問屋もいる、運送した人もいる、生産した農家もいる。
(2)そして農家がこれまで生産するためには粃をとっておいて、それを田にまいたわけで、田に入れば太陽の光もあれば水もいる、肥料をやったり草を取ったり、あらゆるさまざまな条件、因縁を媒介として、いま自分のご飯としてあるわけである。
6. (1)私がまだ若いころ、師と学会に行ったとき、駅弁を買って蓋を取ると、蓋についためし粒からまず食べたものである。
(2)昔はそのように米をありがたいものと考えたものだが、米にかぎらず、どんなものでもたい

へんな関係のなかで空間的にも成り立っている。そのように考えると、一つのなかにあらゆるものが含まれているのだといえるわけである。

7. (1)これを数理哲学で発展させると、一のなかに一から無限数までが全部含まれているから、つぎの二が出る、そして三が出る、四が出るのだ。
(2)だからこの一のなかには二以下の全部の無限数が含まれていると華嚴では説く。
8. (1)数理哲学の末綱^{すえつなじよいち}恕一博士が、数理哲学にこの華嚴を応用した説を前に発表されていた。
(2)二を絶対数と考えると、二があるには一がなければならないし、三がなければ二は成り立たない。そう思うと、二のなかに一も三も四も全部関係している。
(3)その関係性の原理を説いたのが華嚴だと末綱先生はいわれる。二だけ独存を許さない。二が存在しうるのは、一と三、四から無限数があるから二が存在しうのだというのである。
(4)そう考えてくると、「一即多^{いちそくた}」という考え方は、現代の数理哲学にまで応用は可能なわけである。
9. (1)これを社会生活で考えてみると、個人の一と社会の多である。
(2)個人の一というものはけっして一だけでは生きられず、社会の多がないと生きられない。
(3)社会の多と個人の一というものは、たえず調和の関係にないといけない。
(4)もう少し実践的にいうと、これは助け合う関係でないといけないのだ、ということにもなる。
(5)逆もまたそうである。
10. (1)西田幾多郎^{にしだきたろう}博士は、この一を「全体的一」、多を「個別的多」と表現された。
(2)「全体的一の自己限定として個別的多が成り立つ」、あるいは「個別的多の自己限定として全体的一が成り立つ」というのである。
11. (1)哲学者の田辺元^{たなべはじめ}博士はその著『正法眼蔵の哲学私観』において、道元の『正法眼蔵』をハイデッガーで説明しようと試みているが、まわりを空転するだけであった。
(2)『正法眼蔵』はたいへん難解であるが、直感で読むと、ただ一つのことを言っているだけだ、ということがわかる。
(3)すなわち空間的にはこの点、時間的にはその状態はどうなっているかを説いたものである。
(4)道元が「山は山なり。山は山に非ず。山は山なり」といった場合、初めの「山は」の山はいま自分の目の前にある山で、つぎの「山なり」といったときの山は説明であって、現実の山ではなく嘘の山である。
(5)そこで道元は、いま山といったのはそれは嘘の世界だということで、「山は山に非ず」、ここで山といったのは真実の世界ではなく、概念的世界にすぎない。
(6)それでもう一回「山は山なり」といい、ふたたび初めの目の前の山を見ようとする。
(7)道元にとっては、目の山だけが具体的現実なのである。
(8)そうすると、「山」といっても嘘のような感じがするので、道元は山を指すとき山といわずに、中国語の指示代名詞這箇を使った。

12. (1)ここにチョークがある、これを「チョークは」というと言語を媒介とするのでうまくない。
(2)いま私であれば This と使うところだが、道元は宋で勉強したので這箇というわけである。
(3)「この場所」は中国語で這裡シヤリという。それで『正法眼蔵』はわからなくなってしまうのだが、道元がいちばん言いたいのは、生きた具体的な現実だけが彼の関心事で、生きたこの具体的な現実がなぜ仏の相か、それを説明したかったのである。
13. (1)ふつう専門の学者は、道元の『正法眼蔵』は天台の「本覚法門」が背後にあるというが、私が『正法眼蔵』を読むと、華嚴の「性起品」しょうきほんをみごとに描いているように思う。
14. 「一即多」いちそくたについてはのちにまた触れるが、時間的にいえば一念のなかに永遠を見、空間的には一点の中に全世界を包摂するということである。
(1)時間が円であるということがわかると、一念のなかに永遠を見るということがわかるわけだが、われわれの頭は自然科学的、常識的知性で埋められているので、時間は直線と考えてしまう。
(2)過去があって、現在があって、未来がある、こんなものはどこにもない。
(3)あるのは今で、今があって瞬間に消えて、つぎがあるだけである。
(4)今があって、過去は記憶、未来は希望、何もないのである。
(5)ただあるところの直線時間を推定して、それが実在していると思う。
(6)しかしそんな時間はどこにも実在していない。そういうふうになれば、ものはわかってくるわけで、これが一即多ということである。

P86 ～ 90

[コメント]

華嚴經の根本的な考えである「一即多」は、自然と精神を考える上で興味深い。鎌田先生の本書を通読して華嚴經の根本的な考えを理解した上で、原書に接したい。

— 2014 年 2 月 3 日林明夫記—